

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「社会通信」の十七年……………2

公明党分党、民社不満、新生主導の新々党……………3

◇「切り抜きの小窓から」◇
「新民連」は新党構想描けずアセリ……………6

民間政治臨調が仕組んだストーリー……………9

労働組合を労働者の手に取り戻す……………10

―役員選挙は「最大の課題」―……………11

「異様」な雰囲気の中で第一回会議……………14

資料 新青年部運動のスタート(全通青年部年間行動計画)……………15

◇本の紹介 加藤多一さんの新作児童文学……………16

◇「きこえるきこえる」ぼう神物語……………17

◇日本社会党を離党するにあたって 平井英司……………18

入党から十九年、すっかり変わった社会党……………17

「廃県置州」を提言、小沢一郎流「地方分権」論……………15

現場労働者の意識の変化に注目を……………16

全国各地に運動拠点をつくり、結ぶ……………17

―原点に帰り、労働運動再生めざす―……………13

「十・三〇」国労団結まつりに参加しよう……………17

読者からのおたより……………18

旬刊 社会通信

NO.586

一九九四年二月一日

一九九四年二月一日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

「社会通信」の十七年

「社会通信」は今号、満十七歳となりました。発足時、三十二歳だった編集子も齢（よわい）四十九歳。今でも青年部のつもりですが、「光陰矢の如し」の先人のたとえが身にしむ今日この頃です。というのは、二、三年前まで時間に追われることはほとんどなかったのですが、あまりにも早い時間の経過に「アセリ」にも似た思いにとらわれることからです。「もう少し勉強しておけばよかった」とは、後の祭り。

楽しみも多いのも事実です。故向坂逸郎先生、今なお第一線で指揮官の役割を果たされている岩井章氏、そして国労組合員、とりわけ闘争団の仲間から、階級闘争のなんたるか、実務はどうすべきか、己の身の処し方を学ばされ、それが現実生活に生きていと自負できるからです。

私の「苦学生時代」は岩井さんの国際労研時代です。ABCも知らないその時、岩井さんは、「君の好きにやればいいんだ」といわれたのです。困りましたよね。デモ一所懸命、勉強に励みました。当時の主要な闘いは「反マル闘争」。ストライキの連続で、デスクの上でゴロ寝。ストさなか、国労新幹線の仲間と学び合ったレーニンの「ストライキ論」。

本当に勉強になりました。向坂先生は当時、国労運動に全身全霊をつくされていました。国労反合研、当時の勉強会場は西ヶ原寮、今はありませんが、木造三階建、急な階段を七十歳を超えた向坂先生が一回の一番に登られるのです。その時、反合研メンバーの出席はまだほんのわずか。先生は「国鉄のダイヤは正確だけど、君たちは……」と、笑みを浮かべながら皮肉を言われてたように記憶します。

勉強会は午前一時をはるかに超える時がありました。たまに雷が落ちるとき——それはすごいものでした——がありました。先生は二十歳台の出席者の発言を黙って聞いておられ、最後に「勉強になりました」と、階段を降りられるのです。

当時の失敗談。先生のお伴をして国労資本論研をやっていた時。地下鉄・東西線だったと思います。二十歳台中頃の私、先生よりも先に列車に乗り込んでしまったのです。とたんにドアが閉鎖、先生はおいてけぼり!!「滝野君にはまいったよ」としばらくからかわれたことも。

このような失敗と楽しみの連続のなかで、一九七七年「社会通信」が生まれたのです。社会党、社会主義協会に雨、あられの攻撃が加えられた時でした。その中心は国会議員に党大会の代議員権を与え、「協会は」コバルト照射しなくては」とマスコミが喧伝した時です。

「社会通信」の十七年は闘いの連続でした。労戦再編成、中曽根臨調行革、国鉄「分割・民営化」。そして、アツという間もなく社会党が下駄の雪。この間、多くの友人を失ったことも確かです。デモ、かつての「敵」が友となり親しくなることも。

歴史は皮肉屋です。それに伴い、親しい人と疎遠になることもあれば、あの人とは生き別れと思っていた人と旧交を暖めることもあります。闘いの激しい流れの中でお互いの心は千々に乱れます。乱れながらも「階級闘争」の一点で再会できる、この思いを胸に、全力をつくしたい、尽くさなければと考える今日この頃です。

「社会通信」は微力です。微力ですが、この歴史的激動期、やれることはたくさんある、やらなければとの思いでがんばります。ご支援、ご鞭撻をお願いすると同時に、一部でも仲間をふやしてくださいとを。

(滝野 忠)

公明党分党、民社不満、新生主導の新々党

——「新民連」は新党構想描けずアセリ——

新々党結成大会・横浜で各党員動員

新保守主義（サッチャー・中曽根流の）を理念とする新々党の結成大会は十二月十日と正式に決った。会場は横浜市にある横浜国際会議場（みなとみらい21地区）である。大会の場所を大きな会場にしたのは、マス・コミへのアピール性を大きくしようとして当日の参加者を国会議員に限らず参加各党の一般党員をも動員して開くことにしたためである。大会までに決めることは党名（新党「改革」？）と党首である。党首は愛知参院補選の勝利の「論功行賞」として今のところ海部元首相の呼び声が高い。もちろん細川氏と羽田氏は当然不満である。しかし、細川氏は佐川疑惑と女性問題をクリヤしておらず、羽田氏は小沢氏（幹事長になる）との関係で新生党主導とみられることからムリ。その他公明の石田氏は論外だし、民社・米沢氏は力もなく人気もない。だからといって海部氏に実力があるわけではないが、小沢一郎幹事長が牛耳ってゆくには、軽いが一定の人気もある海部党首がよいということらしい。

この新々党の結成大会めざして、公明党（公称・二二万党員）は十二月五日に解散大会を開くことになった。この解散大会では、公明党の国会議員のうち衆参六二人は新々党に参加する。しかし非改選の十一人の参院議員と地方議員（約三千人）と地方党組織と機関紙局（公明新聞など発行）は来春の自治体選挙後に合流することになる。それまでは分党となる。来年四月の自治体選挙後に分党側が順調に合流できるかどうかについては疑問視する人が多い。その理由は、地方議員の大部分は自民党とその知事をはじめとする首長とはズブズブの友好関係であるが、新生や民社の地方党関係とは違和感がある。公明党にとつて機関紙局は聖教新聞と共に「虎の子」的存在。池田大作ボスを自民党や他宗派から守るためにも大切な教育・宣伝機関になっており、永年かけて積み重ねた設備とスタッフを自民党も参加するといえどもそう簡単には渡せないということであろう。新々党はどうなるかわからないという公明側の不安もある。

自民党は、池田大作創価学会名誉会長、山崎正友・元創価学会顧問弁護士（反創価学会派の有力者、自ら「証人」を要望）の二人を従来通り衆院予算委員長に証人として喚問を要求した。だが今度は二人に加えて創価学会副会長の細谷昭氏（常任中央委員、役員室長、本部事務副総長）の国会喚問も要求した。細谷副会長は「学会の金の出入り（どこから集めたか、新生党へはどうしたかなど）に精通していた」と自民党と新宗連側（各宗教団体の反学会連合）はみる。週刊誌などの報道によれば、細谷氏は、学会の財務（年一回六月に実施される資金徴収のこと・全ての会員は半ば強制的に上納するという）関係のデータが入ったフロッピーディスクを持って姿を消しているというのである。二ヶ月前に池田大作氏と細谷氏は金の問題で対立、池田氏はいわれているような「暴君的な言動」で怒鳴りつけた。細谷氏は身の安全を守るため飛び出し雲がくれしたと見られている。

このまま自民党が創価学会への攻撃を強めてゆけば、残った公明党の新々党への合流は

一層遅れるとみるべきで、公明・学会側から自民党との妥協案が出されよう。その妥協は①国会議員の選挙協力②学会側からの資金援助③地方選挙での自民支援（知事など首長選が主体で）。いずれにせよ公明・学会側は池田喚問には応じそうもなく、政策的に相違の無くなった与野党にとっては政党再編での派閥対立と党派のかけ引きに終りそうである。

民社も解散大会・不満も多く

一方民社党は十二月九日に解散大会を開く。民社党の新々党への参加には批判的な国会議員、地方議員はかなり多いといわれ、今後にシコリを残しそうである。もともと党人派の大内前委員長派と労組出身の米沢現委員派とは対立しており、大内派の今後の動向が注目される。新々党への参加は米沢氏を中心にいわば「ボス派」で進められてきたために下部にも不満が多い。これに対しては今月三十日に全国地方議員団会議を開いて「ガス抜き」を行うという。民社党は公明と異なり（といっても組織は弱小で旧同盟系労組にオンブにダッコなのだが）解散後早期に全組織の新々党への合流をすすめるとしている。

民社党は解散後の清算、継承すべき事項を実行するため「民社協会」（任意団体）を設立する。さらに米沢委員長を中心に解散準備委員会がもうけられ、①地方組織の解体、②新々党への地方組織の参加の方策、③約二〇〇人の職員の処遇、④公称十万の党員をどこまでつなぎ止めて新々党へゆけるか、など新々党へのみちはイバラの道である。例えば兵庫県本部は、民社解散後も県組織を存続（兵庫県民社党を名乗る）させるという決定をしている。これに右にならえするところが他にもあるし、新々党に加わらない民社黨員も増えそうだ。新々党に埋没することは間違いないのでこれへの反発がある。米沢民社委員長は、「海部党首、小沢幹事長」になることへ一応のけん制を行い「自民党から出た人だけが党首も幹事長も取ると皆頭をひねる。常識的な組合せになるのではないか。」と新生指導を暗に批判している。しかしこの談話はソウル発である。すなわち直接東京で発言すると一・一ラインに圧えられるので外国からというおそまつである。

新民主連合の新役員と第三回総会

新民主連合は十月二十四日（月）午後第三回総会を開く。議題①党外各党派との交流の現状と今後のすすめ方、②各地の社会党の選挙態勢と他党の動き（党地方組織とのつながり）などとなっている。

新役員も発表されている。会長・山花貞夫、副会長（六人）佐藤観樹、永井孝信、石橋大吉（以上衆院）、糸久八重子、及川一夫、本岡昭次（以上参院）、事務局長、松前仰、同次長（八人）・岩田順介、土肥隆一、細川律夫、大島章宏（以上衆院）、薬科満治、今井澄、峰崎直樹、川橋幸子（以上参院）。この役員は第二回総会で（九月二十八日）役員補充・選任を役員会に一任とされた。

新民主連合のこの役員の顔ぶれは少し淋しい。ほんとうの実力者は出ていない。著名な分裂主義者の本岡氏（兵庫）と石橋氏（鳥根県本分裂の首謀者）は副会長となっている。次長の八人も右派の中の右派といわれる党内タカ派である。

新民主連の実力者田辺誠元委員長は十六日の群馬県本部の大会で、新々党へ動き出している旧連立側との選挙協力の重要性を強調した。田辺氏はことあるごとに旧連立側と会談し

ており、小沢・市川氏等と一緒に写真が新聞やテレビに出るくらいで、非村山色を強めており新々党との合流も考えられる。

新民連について毎日新聞が「資金要請空振り・自動車総連など四単産・『社党離党など条件』と十月十三日号でスッパ抜いた。新民連を代表して山花会長と久保書記長らが全通、全電通、電機連合、自動車総連、ゼンセン同盟、電力総連、鉄労連の七単産幹部に対して「新民連」に資金援助を要望（九月三十日）したが、そのうち自動車、ゼンセン、電力、鉄鋼の旧同盟系中心の新々党支持大労組に「おあづけ」をくった、という内容である。

新民連は村山支持をいう一方で、新生、公明の両党と民社に合流をちらつかせており、内部が一本になっておらず、非村山内閣派である七単産をいらだたせていた。新民連は離党して明確に新党に踏み出すことがなければ金は出せないというものである。

山花会長、田辺元委員長は全通労組の、「ヒモ付き」であることは周知の事実であり内閣山政審会長も同じである。したがって新民連結成には全通、全電通、電機などの右派大組合が後押ししており、新民主連合の性格、金集めのやり方、内部の複雑さが明白になりつつある。

新民連は自民党の一部や日本新党脱出組などとの談合を重ねているが、「民主・リベラル」(社民リベラルとはいわなくなりつつある)という新党理念はどういう方向なのか、さっぱりわからないと言われているようだ。それだけにこの派のアセリ、イラダチは深い。その現れが新民連副会長の本岡昭次参院議員(右派党県本の委員長)と連合兵庫が主導しての構想「近畿新党」であろう。これは旧連立与党に連合兵庫と社会党(右派だけ)が加わり「連合・五党協議会」を結成したことから始まっている。この構想のねらいは①自社さ連立への反発・旧連立側に接近していた本岡氏と兵教組の石井氏らが打出したもので衆院選での比例区の統一名簿を作りたいらしい。②大阪、滋賀の府県は賛成、しかし和歌山県は消極的であるためスムーズには行っていない。③兵庫、大阪で突出することで新民連を新党へ引張ってゆこうという策略も含まれている。

このところ久保書記長は、「社会党解体・新党へ」とか「来年早々に解散・総選挙」など盛んに「空鉄砲」を打ち上げている。新民連のアセリと同じで、新民連の内部が一致していない(村山内閣の評価とこれへの態度、新党への時期、次の小選挙区制下の総選挙など)ことをがっちりともめようというねらいが込められている。しかし村山派や自民党筋は解散は少しも考えておらず、久保発言には困ったものだと反発し続けている。

村山内閣総理大臣はその後自民党・財界へのリップサービスを続けている。原子力発電新設の容認、シーレン防衛の必要性強調、など勤労国民からは日ごとに村山首相とその内閣への怨嗟の声が始まっている。たしかにマスコミの内閣支持率は高いが基本政策の転換、消費税率引き上げ、原発新規容認、海外派兵などによって社会党の信用はガタ落ちである。

しかし一方で広島県本、沖縄県本などを先頭に基本政策を守る護憲社会党に向かって、各地の運動も始まっており、大衆運動の進展によって、新しい展望が開かれつつある。大衆を信頼して前進しよう。

(社会通信政権研究室)

◇「切り抜き」の小窓から(一)◇ 民間政治臨調が仕組んだストーリー

政界再編成の裏にある黒い陰謀

激動の九四年を生きている。これまで肯定されていたことが否定される。反対だったものが賛成に回る。何が何だかわからなくなる。みんながそうになっている。それで新聞の切り抜きを始めた。大量の情報の中からその一部をささみで切り抜く時、その時、時代を切り取っている、そんな気がしてくる。

切られた二つの「K」

この混乱は何から始まったのか？金丸金権政治の批判からだ。しかし、この世論の力を利用して巴投げを打たれた。これが事の始まりだった。宮沢内閣の不信任案の可決・総選挙への流れの中で自民党の中でもっとも金権体質を持っていた連中が分裂劇を演じて見せた。財界と官僚と学者とマスコミで構成した民間政治臨調が仕組んだストーリーはまさに劇的に効果を収めた。

マスコミは自民党と社会党を五五年体制の守旧派、自民党から抜け出したもともと金権的な人々を含むグループを改革派、と位置づけ世論を誘導していった。

守旧派・改革派という色分けは「大化の改新」を前後とする動乱期を説明するのに用いられている歴史学の用語法であり、随による中国の統一の衝撃波から統一中国に飲み込まれまいとする日本の国家自立の過程で現れた権力闘争を表現する言葉であったが、現代もまた外国からの圧力が強力な国家権力の形成へと支配階級を誘っている。

先の総選挙で社会党はこれまでの主張を捨てても自民党以外の保守と連携することを明らかにして支持を大幅に減らし敗退した。同時に自民党も過半数割れとなり、マスコミの用意した非自民連立政権樹立の環境は整った。ここで社会党をつり上げる「毛ばり」として用意されたのが細川・竹村の組閣条件としての「小選挙区制」であった。「政治改革」を合言葉に戦われた総選挙ではどの党派も小選挙区制を公約に掲げなかったにもかかわらず、総選挙後の組閣に当たって「小選挙区制」が最大公約数として作用し、マスコミはこの公約違反に口をつぐみ続けた。ジャーナリズムは権力に対する批判的精神を失い、権力の道具になった事がXデーに続いて明白となった。金丸批判に始まった政治改革は小選挙区制にすり変わった。

この非自民連立内閣の主導権は新生党・公明党にあり、釣り上げられた社会党は次々に固有の政策変更を押しきられて行く。コメ輸入自由化は二度も全党一致の国会決議まで上げた議会の国民への約束であったがそれを変更するという公約もせず、工業製品の輸出を続けるためには農業は切り捨てられねばならないとしてひっくり返されてしまった。

「日本の農業の生産性が低いから外国農産物にたちうちできないのだ。生産性向上を怠ってきた農家が悪い。これまで自民党と結びつくことで安穏としていたからこうなったのだ。」こうしてコメは工業製品がもたらす莫大な貿易黒字の犠牲獣として対日貿易赤字の諸外国に捧げられた。コメは象徴に過ぎず、果樹も畜産も海外との生産性競争にまき込まれ、家族農業が成立しなくなるところに追い込まれた。国鉄に続く二つ目のKが切られた。

自民党と社会党の対立する構図の中では不可能であったことが自民党の分裂を契機とした社会党の政権取り込みによって可能になった。

次なる目標は消費税の税率引き上げである。細川首相は国民福祉税と名称変更するだけで七%への引き上げを図った。小選挙区制もコメ輸入自由化も公約していないことはかなり推進する内閣となっていたのでこれも難なく進むものと見込んでいたようだが、連立内閣の中で根回し不足から反乱を招いてしまい、この提案は引込めざるを得なくなつて一度は隠れることになった。消費税の税率引き上げは一〇%以上、できれば一五%と大蔵官僚は狙いを定めている。小選挙区制のもとの選挙では税率の数字は違つても消費税の引き上げが公約として掲げられ、保守安定支配の議会構成の中でしゅくしゅくと決まつて行くことになるだろう。国際貢献については、湾岸戦争に主体的に絡めなかつた反省から、すでに海部内閣の頃から課題として掲げ、細川内閣はカンボジア内戦の終結も確認できない時点から自衛隊の派兵を強行し、マスコミは連日自衛隊員の「活躍」する姿を放映して国民を教育してきた。

小選挙区制賛成で社会党は「ご臨終」

佐川疑惑で細川が政権を放り投げ、羽田が内閣首班候補と決まつた時、彼はマスコミのインタビューに答えて四つの目標を掲げていた。

1、政治改革 2、国際貢献 3、規制緩和 4、地方分権

一つ目の政治改革は参議院での否決にもかかわらず、細川・河野の「トップ会談」でやり直し議決となつたものである。ケチがついて国民は少し気がついた。しかし、自民党と元自民党が「妥協」した案というのは三〇〇小選挙区と道州制の基礎となる比例区。これは後で検討することになる地方分権と連動したもので、官僚の書いた下敷きそのままの姿だった。三〇〇小選挙区の区割り案を通してしまふまでは不安で仕方がないというのがマスコミと官僚と財界と御用学者の本音であった。社会党に対しては連合からの締めつけを強め、政権に抱きかかえながらなだめ透かして、これを取り込み切らないことには中選挙区制での選挙に持ち込まれ、公約違反のつけが一気に吹き出しかねない。一方でこうした不安を抱えながらも、予想を超えた社会党側の腰くだけの様に自信を持った連中は、内閣総理大臣指名選挙の後で新党派「改新」を結成して社会党排除の姿勢を鮮明に打ち出した。これに反発した社会党は連立政権から離脱し、羽田内閣は少数与党内閣としての組閣を余儀なくされた。

社会党がこの時点で小選挙区制について再吟味し、公約もしていない重大な政策変更を国民に問う解散・総選挙に向けた運動を開始していれば、自民党側から供給される延命装置でベッドに横たわっているという今日の姿にはならなかつたであろう。

「国際貢献」という名の支配

羽田が掲げた二つ目の目標は、細川内閣の時と変わらぬ国際貢献の推進であった。国際貢献は竹下内閣の時に支配階級が作り上げたものの見方であったが、マスコミの教育によつて国民の中に浸透していった。というのも、年配者については先の戦争に対する加害者意識が、若年層には先進国意識があつて、国際貢献はこの両方に響いたからである。

途上国の悲惨な内戦が続いているが、その国境は帝国主義諸国が当時の力関係で引いたものだ。これによって民族も歴史的に成立していた経済共同体も分断され、植民地として宗主国経済の一部として組み込まれていたモノカルチャーな産業構造は政治的な「独立」の後も尾を引いた。そして独立後の経済的不平等から内部対立が激化している。

これが東西対立の時代には資本主義と社会主義の代理戦争という性格を帯びていた。社会主義がその官僚主義によって崩壊し、東西対立がなくなっても、本来の対立関係が解消されていないので内戦はなくなるならない。日本も部品という形をとってこの戦争の武器売り込みに参加している。「死の商人」たちにとって、戦争は好景気を意味する。

したがって、途上国の困難は、先進国が作り出しているものでもあるといえる。さて、その困難を抱える途上国に先進国の軍服を着て「援助」が届く。

その結果、先進国内通するグループがアシストされ、先進国に都合のいい途上国政権ができ上がる。すると、そこから開発援助資金が投入され、その資金を援助国の資本が契約する。つまり、これは海外に場所を移した公共投資であるに過ぎない。しかも、インフラ整備が進めば本格的に資本進出が始まる。現地の安い労働力を搾取することによって先進国側では工場閉鎖や業種転換が一気に進む。資本が進出すればやがてトラブルによって生ずる邦人の生命財産を守るためと称した海外派兵も大義名分を持って受け止められるようになってくる。

バブル崩壊そして「価格破壊」

羽田内閣の目標の三つ目は規制緩和であった。もともと規制はその必要があつて始めたものだ。それが、今となっては大企業金の儲けの邪魔になってきた。

日本の製造工業の生産性は限りなく合理化に協力し続ける労働組合によつてもたらされたものだが、儲け続ける製造業はやがて自己資本の充実から、設備投資資金も自己調達し始め、銀行は貸付先に困る事態となってきた。

土地・株・ゴルフ会員権・絵画：銀行の方から「買え」と言つて貸し付けてくる。この過剰貸し付けが、「買い」が「買い」を呼ぶという形でバブル好況を形成した。バブル最盛期には為替変動と海外金利差を利用すればマイナス金利が発生していたし、債務期間の終了時点で株券への転換を選択させることによつて債務が帳消しとなる債権などによつてまさに「買い」の資金はただ同然で調達されていた。価格上昇が続くかぎり自分は「パパ」を引かないはずだと信じて買いに走つた者のうち、情報力の弱い者が価格反転の犠牲者となった。最後の買い手がパパを引いた。貸し付け競争に走つた銀行は結局、不良債権を抱えて取り付け騒ぎの寸前という状態に追い込まれた。

この不良債権の存在を利用して銀行合併が進められている。合併した後は店舗数の削減をてこにした人員削減合理化が待っている。いわば、大蔵省主導の計画的銀行整理が進められている。信用金庫や地方銀行の合併を誘導するため、地方自治体の「公的資金」が導入されている。この動きは最後には、都市銀行の不良債権整理に国家資金が投入される、その前ぶれでもある。不良債権の整理はこうして進められようとしているが、他方、儲かる投資先を用意するために規制緩和が要求されている。

既存部門は新たな投資が儲けを産まない資本の絶対的過剰生産に陥っている。要するに

供給過剰となっているのである。だからこそ「価格破壊」という減少が展開されているのである。バブルの時代は土地や株など買い占めされた特定の商品価格が急激な上昇を見たが、そのほかの商品価格は現状維持ないしやや下落気味であった。

バブル好況の崩壊は右上りの価格上昇に天井を与え、虚構の買いに支えられた価格の崩壊が始まった。好況時の残業手当に支えられていた最終消費も頭を打ち、下落し始めた価格の底を見極めるために、買い控えが始まった。こうなると「待ち」が「待ち」を呼ぶ。

そして大型スーパーによるプライベートプラン ⅡPB商品をしてことした二分の一価格破壊が始まっている。

(つづく・F)

労働組合を労働者の手に取り戻す

——役員選挙は「最大の課題」——

○月◎日は、関東周辺の若い仲間たち五〇人ほどの交流会に参加した。参加する前は「役員選挙・選挙規定」の論議かと余り興味もてなかった。(正直な気持ち)でも、報告や話を聞いて驚いた。労働組合を、労働者の手に取り戻す。今の労働運動の中で「最大の課題」だと、教えられました。

Aの報告 現職の委員長に、九三票差で勝つ、組合運営の事後承認が多過ぎた。

Bの報告 委員長に立候補。本人は全然運動せずに一〇〇〇票獲得(四千中)

Cの報告 投票の見せ合い。山の中で秘密開票。委員長の人件費千二百万円

Dの報告 分裂組合(第一Ⅱ六三〇 第二Ⅱ一五〇)第二は会社との裏取引

Eの報告 組合員一二〇人。会計監査に絡んで、組合内部がもめ役員選挙不能。

Fの報告 七人参加。バスカードシステム導入に伴う要求。詰まった時の対応。

Gの報告 年間休日一〇四日問題(X社との関係)。Y社と関連企業との関係。

Hの報告 私鉄外の仲間の参加。

Iの報告 役員選挙運動、観光部門がどんどん圧縮合理化。 などなど

1、**労働組合の資本からの独立** 組合の選挙に、資本の介入を許してはならない。投票が完全に機密が保たれているか。組合員の意志が正しく反映されているか。投票箱が、厳密に保管されているか。開票が公正に行われているか。本当のことを言ったら、労資に押え込まれると言う訴えが多い。企業・組合の中に、憲法が生きているか。

2、**運動の自発性** この交流会に自発的に仲間が参加(五〇〜一〇〇人)してくること、素晴らしさ、休暇を取って、二一回も続いたのは何故か。そこに、「本音で論議ができる」本当の労働運動があるからだと思う。論議に強い共感が感じられる、からだと思う。

3、**職場をどう変えるか** 前の交流会の若い仲間の発言、私に忘れられない言葉がある。

「五年、十年の先を見た、組合の戦略・戦術が(無い)必要でないか」

そして私が思うこと、「職場の過去を忘れるなら、私たちの将来が崩壊する」

これは飛島田さんの言葉を、今の職場実態に重なった。

(K)

異様な雰囲気の中で第一回会議

——「全通第一回全国青年代表者会議」報告——

九月二十一日～二十二日、東京に全国各地・地区本部の青年部長約五十名を集め開催された。

青年部改編 全通青年部は、昨年の四七回全国大会決定をうけ、組織改編（三十歳以下の男女で構成、執行機関や決議機関はおかない、各級青年部長は各級執行委員長の任命による選出など）となり、以降一年間を準備期間と位置づけ（先行して移行した地区も数地区あったが）、今年度より本格的な新組織での活動を展開していくこととなった。

会議には、本部中執数名と各地方本部書記長が壇上に、そして扇形に並べられた机に私たちが座り、全国大会を真似ての発言用「演壇」がその中心に……と、これまでの青年部の諸会議とは異なり、異様な雰囲気と感じざるをえませんでした。一日目が、本部からの提起（二時間強）と全体討論（二時間）、二日目がパネルディスカッション、そしてまとめというながれ。

青年部年間活動計画 本部からの青年部年間活動計画（資料参考）では、「男女がともに、個性を尊重しながら、これまでの運動にとられない新しい運動」を創造していくとしており、「青年の意識やニーズ」を大切にしたい運動が強調され、とりわけ、この間の運動の継承・発展は認めないということが発言の随所でうかがわれる提起がなされた。また、青年部としては全国大会のキーワードの「自立・共生・貢献」のうち、「貢献」（地域社会の発展にむけ一人ひとり、また組織が役割を果たす）をメインに取り組みをすすめることも言われた。その中味は、いわゆる労働組合としてのボランティア活動（国内外）をイメージしたものの。

全体討論は、まだ新組織での運動がスタートされていないことや「しゃべりづらい」雰囲気のもと低調だったが、『子育て』について男女で学習してきた。青年には多面性があり、その溝を埋めていくことも運動のキーワードではないか（先行して移行してきたO地区）、「新しい運動を創造したいが、基本組織（支部）が旧態依然とした運動をしており、悩んでいる」（F地区、女性）、「今までの運動を発展させながら継承していきたい」（K地区）、「基本組織のこまづかい的なきらいがある」（G地区）、「職場の問題抜きに青年を組織することはできない」（K地区）、「事業危機のもと新商品の開発を取り組みたい」（S地区）など。

それらをうけ、本部からは中執より「労働条件問題は専従者に任せてほしい」、青年部長より「これまでは大きな行事に大勢集めることが運動の主流だったが、これからは個々の青年部員の趣味や特技にもとづく小さな行事を企画していくという『最大公約数』の運動を」との集約がされた。

パネルディスカッションでは、本部より事前に指名（数週間前に該当地区本部へ連絡）された地区の代表から、各地区や支部（基本組織）で取り組まれている政策制度イベントの報告がほとんどであり、地区本部から渡された原稿を読んでいる発表者もいたことが後から聞かされた。

しつかり青年と向き合う 会議の概要は以上のとおり。当然のことだが本部のめざそうと

している青年部運動が顕著に反映された会議とも言え、自主性や創造性は強調されつつも、民主的な会議とは程遠く、少しでも本部に対しての批判めいたことや職場の問題でも言おうものなら、機関のトップダウンで恫喝をうけたり、強いて言えば青年部長を（次期）おろされるというところも少なくないことも参加者から事実として聞こえてくるというのが現実である。

この会議に参加して、何か新しい運動というよりは新しい企画をすることが目的意識的に捉えられかねないことが一番危惧されるし、「これで良いのだろうか」という悶々とした思いで会場をあとにしてきた。ただ、ややもすると陥りがち（明るく楽しい運動だけでは限界があることはこれまでの全通青年部のなかの歴史が証明）な経験主義や観念的な捉え方は誤りだろうし、本部を批判するだけでは現状は打開できないことも事実である。したがって、大切なことは、これまでもそうしてきたように、しっかりと青年と向き合い、意識や思い（本部はニーズと言うが）をつかむ努力をし、そのことを青年部各級組織に集約し押し上げていくこと、そしてそこに依拠した運動を追求していく態度だろうと考える。その際、青年の意識や思いの背景にある職場や社会の事実・実態についても同時に集約をし、分析をしていくことだろうとも考える。

柔軟性もち挑む 全通青年部を取り巻く情勢の厳しさはこれまでの比ではないが、青年に依拠した運動を追求していくことにこそ、優位性が生まれてくるだろうし、組織化（組織強化拡大）にもつながるだろうと確信をもっている。また、同時に発言などから本部寄りとは見がちな地区の仲間とも夜の交流で話をしたが、来る前に、「何喋っても良いけど、地区にはすべて報告がくるから」という恫喝をうけてきていたり、職場実態と青年の思いを具体的にありませながら職場の問題抜きに青年は組織できないということを話せばうなずいてくれるなど、決して八方塞がりの状態ではないということである。

これだけ非民主的な機関運営のなかにあって、この種会議などでは、少数派としてしたたかさや柔軟性をもって挑む必要はあるのだろうか。それゆえに青年の実態や思い（事実）については大胆につきだしていくカマエも同時に求められているのだろうと感じている。

（全通・み）

資料 全通青年部年間行動計画

新青年部運動のスタートにあたって

第四八回定期全国大会で、新青年部がスタートを切りました。新青年部は、若い男女が共に討論し、それぞれの個性を尊重しながら、これまでの青年部運動にとらわれない、新しい運動を創造していきまます。

社会が急激に変化し、イデオロギー対立であった五五年体制の終焉が叫ばれる中、労働組合の社会的な地位や役割も大きく変化しています。さまざまな形で労働組合の社会的有用性を高めることが、今、私たちに求められています。

全通の運動も、「対立型」の運動から、政策・制度闘争を中心とした「政策型」の運動へと、大きく変貌を遂げてきました。二一世紀に向けてさらに組織を活性化させ、新しい時代を切り拓いていける労働組合を創り上げていかなければなりません。そのためには、

私たち青年部の位置づけや役割も大きく変わる必要があります。

私たちは、次代の全通運動を担うため、学習と仲間づくりを中心に活動をすすめます。基本組織の運動や私たちをとりまく情勢を正しく学習し、青年のニーズや意識を大切にしたいきいきとした運動を創造していきます。こうした活動を通じ、青年どうしのつながりを深め、次代を担う若い仲間のネットワークを創っていきます。また、組織の中だけでなく、社会や地域に目を向けて幅広い学習と仲間づくりをすすめる、社会や地域に貢献できる運動を青年部としてとりこんでいきます。

これからの青年部運動は、自らが主体的、能動的に参画できる活動でなくてはなりません。そのためには、青年部員の奉仕や犠牲の上に成り立つ運動ではなく、一人ひとりの青年部員が、青年運動の創造に向け、多くの知恵を出し合っていかなければなりません。青年が魅力を感じる活動とは何か、青年でなければできない活動は何かを全員が考えていく必要があります。

私たちの運動は、今スタートしたばかりです。この一年は、私たちの運動を創造していくための環境づくりを進めていくこととします。そして、基本組織全体の運動を正しく認識しながら、青年らしい運動を創造していきます。

青年部の役割は、次代を担うための学習・養成組織である

〈具体的なとりくみ〉

一、基本組織の運動の確認・理解・発展

「全通が、今、何を課題としているのか」を正しく認識し、その上で青年部が全体の活動にどう関わっていくのか、青年部運動にどう生かしていくのかを模索します。

全国大会の三つのキーワード

自立：組合員としての自己確立をはかり、組織に対し積極的な役割を果たす

共生：生活のあらゆる分野における課題にとりくむ

貢献：地域社会の発展に向け、一人ひとり、また組織が役割を果たす

このキーワードを青年部として活動に生かすよう運動を進めていきます。特に「貢献」をメインにとりくみます。

二、仲間づくり（組織拡大・強化）

(一) 青年部員数、男女比、年齢構成等を調査し、名簿を作成します。

(二) 青年部対象者の組織化をすすめます。

郵政全体における青年の割合（二九歳以下）は、二六%です。これに対し、全通における青年の割合は、二二%となっています。（組織全体における全通組合員の割合は五二・九%）

青年層の組織化は、将来の全通運動にとって重要な課題です。具体的な目標を設定し、日常的に拡大にとりくみます。

(三) 組織のイメージアップをはかり、より魅力的な組織づくりをめざします。

青年が魅力を感じる組織とはどういうものかについて考え、青年のニーズにあった運動を行える組織づくりにとりくみます。

(四) 青年部員の集まる場をつくります。

地区本部や支部、分会の書記局に青年部員が集まりやすい雰囲気を作り、青年部員とうし、基本組織の役員、先輩との交流を深め、人のつながりを強めます。

(五) 男女が共同して参画できる青年部をつくります。

これまで別々の組織で運動をすすめてきたことから、男性と女性との間には意識のギャップもあります。青年部では、お互いの理解を深め、共同して参画できる青年運動を創り上げていきます。

三、リーダー育成(学習)

(一) 労働条件、労働協約などの雇用と労働条件の問題について正しい認識を得るため、積極的に学習活動にとりくみます。

(二) 高齢化社会に対応し、年金・税金等、福祉制度について学習します。また、政治、環境、平和、人権、男女共生社会など、幅広いテーマの学習にとりくみます。

(ア) 講師の選定にあたっては、基本組織と十分に話し合ってから決定します。

(イ) 学習会のカリキュラムや運営について工夫をはかります。

(三) 「遊び」をとり入れた集会やイベント等を開催し交流を深めるとともに、企画・立案・実行などの経験を身につけます。

四、参加型から参画型の運動への転換

(一) 地区、支部、分会の特徴を生かした運動にとりくみます。

大きな行事で多くの人を集めるだけでなく、より小さな単位で様々な活動に取り組んでいく必要があります。そのために、支部を中心とした青年部の運動を高めるよう模索していきます。

(二) 青年部員の趣味や特技を活動にとりいれ、「参加してよかった」「また参加したい」という感想が聞けるような活動の展開をはかります。

(三) 青年部員自身が、楽しめる運動づくりをはかります。

五、社会・地域活動への参画

(一) 組織を有効に活用し、身近な国際連帯活動にとりくみます。

(二) 地域に根ざした活動にとりくみ、社会に貢献する全通をめざします。

(三) 労働組合としてできるボランティア活動に積極的にとりくみます。(以下略)

◇ 編集部だより ◇

▽社会党への「選抜肢」はいよいよ限られてきました。本誌編集部にも「どうすればいいでしょうか」「統一地方選までがまんします」「離党しました」等々、いろんなお便りが寄せられています。

▽編集子からの要望。みんなの心は「このままではいけない、なんとかしなくては」だと思います。残る人も去る人も、この心の一つにすることです。そして新たな社会党をつくる共通の目的をもつことです。

▽そのため「護憲ネット」を結集軸にすることです。そして内と外から力を合わせることで。

(T)

◇ おもしろい本紹介します。Mさんへ ◇

『きこえるきこえる』 ぼう神物語

加藤多一さんの新作児童文学

「読んでくれましたか?…いきなり国労闘争団が出てきたりして、めちゃくちゃな本だよね。…でも、いくつかのメッセージは織り込んだつもりですから。…」
久しぶりの電話の声がなつかしい。

小さい頃、読書の大嫌いだっただけには童話の記憶はない。浮かぶイメージといえば、メルヘン、夢という程度の貧困さなのだ。加藤さん自身の言葉をそのまま借りれば、「ヘンな作品でしょう。自分のワクをこわそうとしたもので、批評家たちもどううけとっていないのか、こまっているみたいです」とのこと。児童文学としては、変わった類の作品なのかもしれない。

加藤さんと初めてお会いしたのは、国労闘争団との交流で稚内を訪ねた時のこと。もう二年前の冬(九二年二月)になる。現在は住まいも剣淵町に移り、念願だった道産子(馬)を家族に迎えて、文筆活動を中心にされている。この一年余は、沖縄で戦死したお兄さんのことがテーマのひとつで、沖縄現地にも長期の取材に出られている。

さて『物語』は、北海道の山里にひとり暮らす六五歳の良治郎(ほとんど加藤さん自身と聞いていいでしょう)を主人公に展開していく。語りは、人間を愛するゆえに天上界に戻れなくなった落ちこぼれの神様「ぼう神」、良治郎のボロ靴に住み着くことになって、いっしょに行動することになる。——彫刻家・砂沢ビッキを通して語られるアイヌの人々の文化・自然との共生: 国労稚内闘争団・家族会(知った人たちが何人も登場します)との交流を通して語られる働くものの誇りと連帯: 兄の最後の地・沖縄への旅を通して語られる戦争と人間—沖縄戦での死者二〇万、うち本土の兵隊の死者六万五千、うち北海道出身の兵の死者一万、その中でも差別されたアイヌの青年兵の存在、これらの事実にもふれている。——やがてこれらの出会いは、良治郎の中でひとつの確かなつながりを形づくっていく。良治郎の体の中に「立ちあがっているもの」(人間にとって大切なもの・生きる力とは何か、というようなことでしょうか)を予感させて、『物語』は終わっている。

いま私の前にある、中小零細末組織労働者の実態とささやかな仲間づくりのこと、そして「クサッテいく」わが社会党の現状を考えると、あらためて一人ひとりの体の中に「立ちあがってくるもの」を大切にしたい組織づくりをめざしたい、そんなことを考えさせられた。

(* 出版社 文溪堂 * 定価 一、三〇〇円)

〈追記〉書籍は、毛利が扱っています。希望の方は——

* 埼玉県上福岡市北野一—八—六 TEL〇四九二—六四—四三六九

までご注文ください。なお著者扱いによる割引分は、稚内闘争団の子どもたちへのカンパとさせていただきます。(毛利孝夫)

◇ 日本社会党を離党するにあたって 平井英司 ◇

入党から十九年、すっかり変わった社会党

「なぜ、社会党に入党したのか？」私は日本社会党に入党して十九年。今ほどこの事を考えさせられたことはない。

一九七四年、今の職場に来て一週間と経たぬうちに組合はストに入った。闘う組合であった。赤旗が掲げられ、一〇〇人を越える人達が赤い鉢巻きをしめ、腕を組み、揺れながら歌う『がんばろう』の歌声は今でも耳の奥に残っている。その驚きは十九歳の私の胸に大きな波紋を起こさせた。そして、その年の秋、頸腕という職業病が私を襲った。その時、頸腕の闘いは組合全体を覆っており、その先頭に立って闘っていたのが今も共に活動を続けている社会党員であった。会社の非人間的な扱いに怒りを持って、闘う社会党の人達に共感を覚え、一年後自分も後に続く事を誓い入党した。

あれから十九年、社会党は変わってしまった。『綱領』『平和四原則』『指令第四号』『労働者党员組織を整備せよ！』『日本における社会主義への道』結党以来、党の発展と共に素晴らしい決定がされてきた。これらは党の「生命」とも言えるものだ。だが次々と名目的に、実質的に放棄されてきてしまった。今年の第六一回全国大会の「基本政策」の変更は、かつての社会党から自民党への変身である。その変化は量的変化ではなく、質的变化である。再び元に戻ることは有り得ない。

だが、今も下部組織の多くの党员が怒りを感じながらも労働者、勤労大衆の為に職場、地域で活動を続けている。先に離党することを、私は心苦しく思う。今の社会党を一言で言うならば「脳死」の状態と言えるのではないか。中央段階では如何なる決定がされようとも、職場で党活動ができるとは到底思えない。人間は脳死しても手足は暖かく、髭も伸びるが、やがて死は全身を覆ってしまう。やがて真面目な党员は離党するか無気力になっていく。その事は私の経験を通して言うことができる。現在、党の職場支部では職場の廃局反対の闘いしており、中央官庁への申し入れを社会党を通じてやろうとしたが出来なかった。上部の社会党は反動的な組合に目が行っていると思えない。ある社会党議員にいたっては先頭にたつて私達の闘いを潰そうとするしまつである。

私は怒りを持って離党する。そしてまだ定かでない新党に、私の人生を掛けてみたい。
一九九四年九月

「廃県置州」を提言——小沢一郎流「地方分権」論

昨年八月に連立政権が誕生した。それからコメの部分開放や小選挙区比例代表並立制が決まったが、それは与党最大の社会党の力というより新生党の小沢一郎代表幹事の手腕での成立である。

同氏は昨年五月に『日本改造計画』という本を出した。一読をすすめたが、内容は国際国家・日本のあり方について述べている。ここでは、「第一部・いま政治改革を」の「全国を三百の市に」について考えてみたい。

地方分権基本法を制定する。これは中央政府が防衛・外交に全力をあげ、国民生活に関

する分野は地方に一任する。「国は人員、予算とも余力が生じる。仕事が増えるはずの地方自治体も効率的な人員配置が可能になる」と記されている。

受け皿となる自治体は三百の「市」に再編するという。日本には三千三百の市町村がある。この市を基礎自治体としている。一律に区割りできないので「地方中核都市」「大都市」「大都市周辺の衛生都市」などに類型化していく。

では都道府県はどうなるのか。という疑問が残るのも当然。「地方自治体は一層制（基礎自治体のみ）がよいと思っている。将来は……州を置くことも考えられるが……と都道府県はなくなると読みとれる。「そんなバカな」と言う県職労の仲間は、国鉄分割・民営化を想起してほしい。本音の最後に「改革には痛みがともなう」とある。その痛みを私達がうけることはゴメンである。

現場労働者の意識の変化に注目

選挙管理のための分会長・世話人の確認のための電話を入れて、二つの強烈な反応があった。どちらも組合員二名の出先の小さなところ。未加入者をかかえて、ただ組合に加入しているだけといった意識。「一人のうち一人を窓口にして」との問いかけに激しい反応が返ってきた。

「ずっと前から、規約集を持ってきてと役員に言っているのに無視し続けられていた。規約もわからんのに、どうやって世話人決めると言うのよ！もう組合やめようかと思ってるよ！」「世話人？そんなもん二人しかおらんのに、何が窓口や。組合抜ける者の方が多いやないか。ちゃんと入れてから話に来い。私ら、組合費取られてるだけやないか」

これに加えて、支部青婦部書記長を専従で抜かれると聞いたとたんに、「大会議案書の私の肩書き消してもらわなあかん」「彼が支部青婦やめる時は、私もやめる約束や」と切れてしまう副部長。

がまんしていたものが一気にふき出している。出方は様々だが職場で押えつけられていることが、その主戦場で戦えず、別のところへ向いているとも言える。

これまで、じつとガマンでしのいできた人々が、そうし続けることを止めはじめた。ここに突込んで討論しなければ、本当の解決にむけて動きはじめる力が逃がされてしまう。職場の労働者は明らかに変化し始めている。組合員だけではない。未加入者も変化している。

この四月「僕はもう決めたんです。何を言われようとやめます。」と組合を脱退したK君。なんと、反核平和リレーの見送りに出てきていたのではないか。驚いた。翌日、廊下で「きのうはありがとう」と呼びかけると、「県に入って三年、このリレーを走り続けた。本当は今年も走らなかったんです。」と頑固者が正直者に変わっていた。「そろそろ帰って来いよ」との問いかけに照れながら「まだやめて三ヶ月ですから」と応じ始めた。そろそろ復帰してくれそうな感じがしてきた。何しろ彼は「瓢箪から駒」に登場する「賃上げ○円要求」のその人だから、注目しないわけにはゆかない、こちら側の理由もあるのである。

今年で青婦部常任委員会を「卒業」するT君は「役員選挙の車の運転、今年もあるんですよ」と言ってくれたりする。誰の職場でも労働者は変化し始めている。敏感にしていれば、その変化に気付くことができる。

全国各地に運動拠点をつくり、結ぶ

——原点に帰り、労働運動再生めざす——

一九八一年以降の臨調行革攻撃は『戦後政治の総決算』路線として、日本の平和と民主主義を守る労働運動の砦であった総評を解体し、護憲勢力の中心軸である日本社会党への右傾化解体策動を強め、そして「憲法改悪」を政治日程に上げようとしている今日、この行き先は日本資本主義の武力的海外進出であり「いつかきた道」へと逆戻りすることである。九月三日、日本社会党臨時大会において「当面する政局に臨むわが党の基本姿勢」が採択され、日本社会党の基本政策を変更したことにより平和と民主主義・人権・環境等、護憲を闘うすべての勢力に壊滅的な打撃を与え、かつ、日本社会党の存立問題まで左右する重大な局面を迎えることとなった。

このような情勢の中で、中央主導の運動を克服し地域から労働運動の再構築を求め、護憲平和の闘いを強めることが重要な課題だと考えています。

昨年九月、道北七地区労が実行委員会体制を作り「護憲・平和・地域労働運動」シンポジウムを開催しました。この経験と成果を活かし、地域を横断的に結び自らが作り出す運動を求めていくことから、今年も道北地域の仲間が結集して「全体情勢を把握し具体的に何を始めるか」を学ぶことにしました。

音威子府と浜頓別両平和運動センターが「護憲・平和地域講演会」呼びかけ、十六団体が賛同し、賛同金を拠出して前衆議院議員常松ひろし氏を招いて開催しました。道北管内から一五〇名の仲間が参加し、地域的に学習の機会がない状況の中で「戦後日本の平和に対する仕組み・臨調行革の本質・社会党の動向」等、大変分かりやすく問題提起され地域の闘いへの自信となりました。常松氏の講演でも「独占企業優先の政策を変える闘い」の重要性と、「労働組合と労働運動を強めていく取り組み」が強調されていますが、あらためて職場から反行革闘争を強め地域闘争へと拡めていく必要性を痛感しました。

総評が解体し『連合』発足に伴い労働運動の後退が余儀なくされている現状の中で、護憲平和の旗を掲げる日本社会党を先頭に全国各地で反戦・反自衛隊・反基地・反原発闘争など、多くの地域住民と連携して取り組んできました。

もう一度原点に立ち返り、「自ら運動体を作り出す」「全国各地に運動拠点を作り出す」「その運動拠点を結び出す」ことで、労働運動の再生を求め護憲平和の闘いを強めていくことで奮闘します。
(北海道・M)

「十・三〇」国労団結まつりに参加しよう

国鉄「分割・民営化」による不当な採用拒否からはや七年半が経過した。友人の子どもたちも小学生から高校生にまで成長した。「お父さんを早く職場にもどして」と、彼らも一所懸命だ。十月四日の中労委命令は昨年末の北海道命令の表紙を変えただけ。国労組合員、闘争団とその家族、彼らを支援する私たちの怒りは頂点に達しつつある。

このような時、「団結まつり」が開かれる。時は十月三十日、場所は亀戸中央公園（東武亀戸線「亀戸水神」駅下車二分、JR総武線「亀戸」駅下車一分五分）。友人、知人、家族と相集い参加し、国労闘争団の仲間を励まそう。意外と励まされるのは、私たちかも……。

◇ 読者からのおたより ◇

「闘いは続く、国労帯広闘争団」として北海道新聞の帯広とかち版に七回連載されました。まとまった記事で闘争団も連帯する仲間にも励ましになると思いますので、多くの方に紹介します。十月四日、福岡・熊本のJ・R不採用事件で、中労委は北海道と同じ命令を出しました。北と南から中央を攻め政府・J・Rに責任をとらせ、勝利解決までがんばります。(新得町・S)

編集部より すばらしい連載記事お送りいただきありがとうございます。十一月下旬、北海道に参ります。お会いすること楽しみにしています。

カンパありがとう 北海道闘争団合宿の諸準備におわれ、お礼遅くなりました。ごめんなさい。私たち闘争団の根性がこれから試めされると思っています。一昨年の「最終解決案」や昨年の中労委命令をふまえるならば、「政・労・使」の交渉で解決できるとは考えていません。「交渉」を有利に導く闘いがたいへん重要と思います。弱さや不十分さを抱えています。一日も早い解決、全面解決を求める気持ちでは一致します。そのためにも全力で闘いぬく決意でいます。(帯広闘争団・H)

編集部より 連日お疲れさま。また地震。被害はありませんでしたか。世の中狂っているから自然まで狂い始めたのでしょうか。

「護憲新党」結成は不可避 九月三日の社会党大会での基本政策放棄に憤りを感じます。なによりも党内民主主義をふみにじったことです。「まだ綱領変更阻止がある」という態度は甘いと思います。来年の統一自治体選、参院選をにらんで、護憲新党を早急に結成することが求められていると思います。地方でも努力しますが、中央(東京)でのがんばりを期待します。(新潟・M)

編集部より 「護憲の新政治勢力」の結成はだれもが望んでいるところ。その準備が急がねばなりません。「護憲ネット」に集中することが大事です。地域で中央で、全国的にその旗が見えるようにすることです。

「護憲の党」残す 半年後も「護憲の党」がしっかり生き続けているよう、地方でがんばりたい。(高岡・KH)

編集部より バカ花君やチョロ松君らは「護憲の党」を名実ともに消そうとしています。「護憲の党」を生き続けさせるには、「分裂」をも辞さぬ覚悟が必要です。

一部拡大 七月より一部拡大できました。講読された方は内容が充実していただきたいへん勉強になるとのこと。すすめがいありというものです。彼はJ・R九州でがんばるそうです。仲間が増えるということは力になることを実感しています。(福岡・I)

編集部より お久しぶり。拡大ありがとうございます。これから九州にしばしばうかがうことになりそうです。確定はもう少しかかると思いますが。がんばりましょうや。

仲間が泣いている 日本社会党どうしたんでしょう。どこへ進もうとしているんでしょう。今まで社会党を支えてきて地域の仲間が(まじめに)泣いています。(神奈川・T)

編集部より みんな泣いている。涙をふり払い前に進まねば。

社会党解体早まりそう 過日、仲間と意見を交換しました。今後の方向についてアウトラインを決めるためです。社会党解体が早くなりそうです。(K)

編集部より 「区割法」国会通過が一つのポイントですね。